

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083

京都市中京区三条柳馬場東入中之町10

代表取締役社長 川下 晃正

TEL (075) 211-7277

FAX (075) 211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

総合社会福祉研究所 会員のみなさまへ

第27回総合社会福祉研究所定期総会のご案内

日時：2016年9月3日(土)10時半～

場所：立命館大学衣笠キャンパス以学館1号ホール

**内容：社会福祉をめぐる情勢の特徴と2015年度事業報告／2015年度
決算／第15期（2016年度・17年度）事業計画（案）等。**

※その後同会場にて、第22回社会福祉研究交流集会を開催します。

※後日、第27回総会および集会のご案内、出欠通知（委任状）を送付します
ので、ご返送をお願いします。

※その他、総会・集会に関するお問い合わせは下記までお願いします。

総合社会福祉研究所

TEL06-6779-4894 <http://www.sosyaken.jp/>

FAX06-6779-4895 E-mail:mail@sosyaken.jp



原爆被爆者の人生を伝えたい

——大阪福祉事業財団の副施設長16名が向き合った広島被爆体験者との出会い——

かわもと けんじ
河本 謙治さん（90歳）

71年前、広島に原爆投下された被爆体験を、身体のケロイドを私たちに見せながら語ってくださいました。原爆の恐ろしさを、次の世代へ語り継いでおられます。

今でも痛みを抱えながら、身体的な苦痛に加え、差別や偏見なども乗り越え、原爆症の認定を取得されました。「これは、原爆被害相談員の会の方への恩返しでもあります」と感謝の気持ちを話されます。

寺尾興弘さん（七五歳）
てらおきひろ

原爆ドームの戦没者名簿には、寺尾さんのご両親の名前が載っています。だから、原爆ドームの前に立つと、両親が「がんばれよ」と言ってくれているような気がする、と寺尾さん。

寺尾さんは、「手に職をつけなさい」と言っていた母親の言葉を思い出し、三九歳のとき、会社員のかたわらステンドグラス制作を習いはじめました。そして、亡くなった母を思い、ステンドグラスの原爆ドームを制作。すると、悲しい気持ちが続くよう、元気で美しかった母の姿を重ねて、「原爆投下前の活気があった頃の産業奨励館も制作した」と、つくられたステンドグラスを見せてくださいました。



2歳のときに被爆した佐々木禎子^{あだこ}さんは、10年後の小学6年生のとき突然、原爆症を発症。入院中、ベッドに寝たまま薬の包み紙で鶴を折りました。千羽鶴を折ればやく退院できるという願いがかないと信じて、折り続けました。

しかし、中学生になった禎子さんは鶴を折りながら亡くなってしまいます。その後、級友たちが恒久平和を世界に呼びかけるため、「原爆の子の像」(右写真)をつくろうと立ち上がりました。今も世界の子どもたちの平和のシンボルになっています。





71年前。雲ひとつない青空に、平和な生活を営んでいる私たちと変わらない人々のうえに、死が舞い降りた……。オバマ大統領の広島での演説と同じ晴天のもとで、研修1日目終了。フィールドワーク後に原爆ドームを訪れ、ようやく傾きはじめた夕日に照らされたドームを眺め、さまざまな思いが交錯します。

ほぼ毎日、ドーム前でボランティアガイドをされている三登浩成^{みつとこうせい}さんの話を聞かせていただきました。ドームを通して71年前から続く被爆者の気持ちや歴史、同じ広島で被爆した中国や韓国の方々の複雑な思いが語られています。

(文……1面・遠藤佳代子、2面・寺田恒^{ひさし}、3面・尾道敦子、4面・杉原佳子^{よしこ})

●特集● 原爆被爆者の人生を伝えたい

広島を訪れて～被爆者の思い、そして世界平和への祈り～	10
高東征二さんのおはなし	尾道 敦子 12
二度と同じ苦しみをうまないために、すべての被爆者に向き合うべき	
望月照巳さんのおはなし	杉原 佳子 14
鎮魂と平和を伝える場所の意味を考える	
三村正弘さんのおはなし	寺田 恒 16
被爆者問題から人権問題を考える	
原爆ドームと平和公園に生きづく平和と命への願いと行動	
	平瀬まり子 18
平和への願いを強く思う	寺本 裕子 20
フィールドワーク（写真集）	22
被爆体験を聞く◆河本 謙治さん	26
——島田由加里・吉永みゆき・高原信昌・栗林浩貴・尾山浩志	27
被爆体験を聞く◆寺尾 興弘さん	31
——赤坂啓子・北口美弥子・宮内義人・石垣登美子・横山道夫	32
被爆地ヒロシマの研修を終えて	36

●トピックス●

私には、ハンセン病を風化させない義務がある	40
地域の介護を背負っているのは私だ～中部学院大学訪問記～	44
大学と現場の連携で、岐阜の福祉を支える専門職の養成を	
	新井 康友さんに聞く 46
なぜ母親は娘を手にかけたのか——千葉県銚子市母子心中事件	
	田中 武士 48
第22回社会福祉研究交流集会 in 京都	50

●連載●

フォーラム だれのための政治か	細貝大二郎 56
施設から子どもたちの未来ををきりひらく	
家族と離れて暮らす子どもの居場所に	安場 美慧 58
相談室の窓から 中年のひきこもり問題を考えたい(2)	青木 道忠 62
育つ風景 保育園での片づけをめぐる	清水 玲子 64
「助けて！」って言うてもええねんで！	
悩み、考えながら、歩み続けたい	徳丸ゆき子 66
全盲夫婦の出会いから 二人三脚のあゆみ	千田勝夫・絹枝 68
移動の自由をもとめて(5) ——駅ホームは欄干のない橋・その3	
映画案内 『ジミー・野を駆ける伝説』	吉村 英夫 70
現代の貧困を訪ねて 介護保険は詐欺である	生田 武志 72
似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート	
「らしさ」を盛り込むのじゃ!!	ラッキー植松 74
ホームレスから日本を見れば	ありむら潜 76
花咲け！男やもめ	川口モトコ 77

●表紙の絵●
神門やす子



かんげつ
寒月（エッセイ集発刊にあたって）

早川一光・ゆき

歌集以外、ちょっと珍しい本題名――

字典を引くまでもなく、いかにも寒そうに見える、冬の月

二度と会いたくない、敗戦の

地獄のような日々の、くらし、の中で

今の日本をつくりあげたのは

あんたたちの お父さん だったんだ

と 始めて 知った

この人たちが残していったのは

・ となりの人の空腹は 自分の空腹

・ となりの方の病気は 自分の病気だ

感ずる 「感性」が

私達の今日の日本を創っていった

これは 私達に 不動の道 を示してくれる

「北極星」のようなものだ



画：神門やすこ



今年二月、雪の舞う秋田空港で、早川ゆき（わらじ医者 早川一光の女房・幸恵さん）からのエッセイ集出版の打診をいただき、大阪に戻るとエッセイ集の原稿が届いていました。エッセイの多くは二〇〇一年に発行（わらじ医者の女房）されていましたが、新たに加えたものもあります。原稿を読ませていただきながら、脳裏に、ひとつひとつのエッセイを手にとって、語り継げるようなかたちにしよう。そのために、ひろばの表紙を描いていただいている書画家の神門やすこさんに挿絵をお願いしてみようと早々に、神門さんに連絡を取らせていただきました。神門さんは、即答でした。そして、相当な頻度で、早川家を神門さんと訪ねることになります。ひとつひとつのエッセイの背景や思いをしつかりと受けとめよう。そのイメージのなから挿絵を描いてみようとの神門さんの思いもありました。何回かの打ち合わせを過ぎた頃に、神門さんから挿絵の案を持参していただいて、いつものように早川夫婦と打ち合わせが始まりました。そこで、早川一光さんとの火花の散るような場面がありました。神門さんが受けとめられた思いとその表現に対しての早川先生との葛藤の場でした。この頃から、この本づくりは本当の意味での佳境に差ししかかったと思います。早川さんは、皆さんご存知のように血液の悪性腫瘍の一つの病に、家族や様々な方々と一緒に向き合いながらいま生きておられます。医師から患者へのいわゆる転向——。このエッセイは、西陣の地域で暮らす人々に心底向き合ってきたわらじ医者と共に生活を送り、支えてきた幸恵夫人の、いわゆる馴れ初めから今に至る物語です。それをひとつひとつの場面を切り出して、描かれています。その場면을神門さんの書画で彩っています。『寒月』という題名は、幸恵さんが選ばれました。この寒月は、エッセイのひとつです。お読みいただければ、題名にされた意図が伺えると思います。そして、表紙の題字は、一光さん自身が書かれました。急がずに、ひとつひとつ、エッセイと挿絵を覗きながら、お読みください。わらじ医者と、支えてきた幸恵さん夫婦の、そして共感した神門さんの書画に、温かさを覚えていただけると何よりです。

（編集主幹 黒田孝彦）

（早川ゆきエッセイ・神門やすこ画・早川一光監修『寒月』は、八月初旬発刊 二〇〇〇円（税別）申し込みは、ひろばホームページより。九月四日社会福祉研究交流集会二日目ひろばセミナーで挨拶予定）



特集 原爆被爆者の人生を伝えたい

——大阪福祉事業財団の副施設長一六人が向き合った広島被爆体験者との出会い

「私たちが、なにを風呂敷に包み、次の世代に渡すのか。いま大事になっています」。

わらじ医者の早川一光^{かすてろ}さんが先日話されました。そして、「重くても包んで、手渡さなければならぬものがある」と付け加えられました。京の西陣という地域を舞台に、医療活動を軸に、地域に根を張り、地域の方々と共に生きてこられた早川さんと幸恵夫人。戦争反対と平和の願いはご夫婦^{いしずえ}の礎^{いしずえ}のようでした。

さて、例年八月号は、平和と福祉をテーマに発信してきました。「来年（今年のこと）の八月号の企画はどうしようか」と模索のなか、昨年の八月六日に広島でお会いした林正男さんのことが頭から離れません。「この貴重な体験を福祉現場のなかで共有にできないものか、そして、その推移を本誌で発信してみよう」と発行元の大阪福祉事業財団の小山さん（現高鷲学園施設長。当時は、大阪福祉事業財団副施設長会議運営委員会責任者）に相談しました。

そして、副施設長の方々に広島原爆被爆者に直接お話をうかがう、いわゆる聴き取り調査を実施してみようとの企画に至りました。まず、運営委員のメンバーが、先行して現地にうかがい、視察のイメージをかため、今年五月に、副施設長のみなさん一六名（ほかに二名引率あり）が広島原爆の遺跡や資料館、被爆者の方々と支えるみなさん、

もちろん、被爆者の直接のお話も含めて、取り組むことになりました。この企画は、当初から広島原爆被爆者相談員の会の三村さんに相談し、企画への全面的な協力をお願いしました。

原爆被爆者から直接、体験をうかがえる機会は、限られてきました。例年八月号では、憲法九条と二五条は不可分だと伝えてきました。とくに、違憲の安保法制の強行の現代的問題、福島第一原発事故をはじめ、その後の原発再稼働の動きや海外に原発の売り込みをおこなう政権のすがたなど、一部にある原爆被爆と原発事故が別問題のような風潮も流れるなかで、日本で起こった広島・長崎の原爆被爆を風化させずに、当事者の体験を生でうかがう機会がもつ意味は、例年以上に重要になっています。

同時に、今年から一八歳選挙権が施行されました。若い方々に、その体験を伝える責務は为什么呢。もちろん、わかりやすく伝える技量も必要ですが、やはり体験した心を伝えたいと思います。オバマ米国大統領が広島に立ち寄り、追悼したというできごともあり、ある程度、話題にもなっています。しかし、だからといって、原爆被爆者がどのように過ごしてきたか、いま生きている人々からの声が紹介されたかどうか、社会問題に、政治問題に、提示されたかは疑問です。

平和と福祉を、読者の皆さんと共に考えたいと思います。また、みなさんからのご意見やご感想をお寄せください。

（編集主幹）